



小学生の読解課題・小6・物語文④

次の文章は、イギリスの片田舎で獣医として、長年多くの動物の治療にあたってきた作者の体験をもとにして書かれたものです。

診療所の廊下の薄暗がりの中で、私は犬の口先に何か質の悪いできものでもできたのかと思った。しかし、近づいて来た犬をよく見ると、それはコンデンスミルクの空缶にすぎなかった。コンデンスミルクの空缶が犬の口先に噴き出てくるというのは穏やかな話ではないが、やって来たのがまたしてもブランディだと知って、私はほっとした。私はブランディをひよいと診察台へ乗せた。

「ブランディ、おまえ、またごみ箱をあさっていたんだな」

大きな茶と黒の雑種犬はすまなそうにやりとして、なんとか私の顔をなめようとした。しかし、それはできない相談だった。なにしろ舌先が缶のなかにはさまれていたからだ。顔がなめられない埋め合わせとばかり、尻ごと激しく尻尾を振った。

「すみません、ヘリオット先生、またお世話になります」

魅力的な飼い主のウエストビー夫人は、哀れな笑みを浮かべた。

「この犬は、どうしてもうちのごみ箱から離れられないんです。時々わたしと子供たちで缶を取ってあげるんですけど、この缶はしっかりとくっついてしまつて。舌が蓋にはさまれてしまつたんです」

「なるほど・・・、確かにね・・・」

私は金属蓋のぎざぎざの縁を、そっと指先でたどった。

「これはちよつと厄介ですよ。犬の口を傷つけたくありませんから」

これまでもブランディのために同じような措置を何回か取っていた。それを思い出しながらピンセットに手を伸ばした。ブランディは私が診みている患者の一匹で、のそのそ歩く少し間抜けな大型犬だったが、このごみ箱あさりはこの犬の妄念になっていた。缶を見つけ出し、おいしい残りものをなめるのが好きなのだ。しかし、あまりにも熱心にどこまでもなめるものだから、いつの間にか鼻先が深みにはまり、抜けなくなる。フルツサラダ缶、コーンビーフ缶、ベイクドビーンズ缶、スープ缶などに懲りずに何度も鼻を突っ込み、家族や私から助けももらっていた。彼が鼻を突っ込みたくない缶詰は何一つなさそうだった。

私はピンセットで蓋の縁をつかみ、先端が舌から離れるように奥へそつと折り曲げて、缶を鼻先から外した。その瞬間、ブランディは喜びと感謝の念を表わそうと、自由になった舌で私の頬をべろべろなめ回した。

「このはしやぎやめ、やめんかー!」

私はあえぐ犬の顔を押しやり、笑いながら言った。

日

点

「全くしようがない。そこから降りなさい、ブランディ」

ウエストビー夫人は犬を診察台から追い落とし、厳しい口調で言った。「缶が取れてそんなに大騒ぎするのはしかたないけど、おまえのごみ箱あさりにはもううんざりだわ。これからはもうやめなさい」

叱責は、激しく尻尾を振るだけの犬にはなんの効果もなかった。それに飼い主のほうも笑みを浮かべたままだった。

ブランディに腹を立てることはだれにもできなかった。なにしろ気のいい犬で、愛情と忍耐力の大きな塊といったところだった。ウエストビー家には三人の女の子と男の子ひとりの四人の子供がいて、彼らがブランディの脚を一本ずつ持って逆さまに運んでいるところや、時には赤ん坊の服を着せ、乳母車に乗せて押ししているとこを私は目撃していた。彼ら子供たちは、犬を交えてありとあらゆる遊びをやっていたのだが、犬は全くの上機嫌で耐えていた。むしろ子供たちとの遊びを楽しんでいたのだと思う。

ブランディには、ごみ箱が好きということのほかに特異なところがあった。ある日の午後、往診に伺ってウエストビー家の猫を診ていた時、犬が奇妙な振る舞いをしているのに私は気づいた。ウエストビー夫人は肘掛け椅子に座って編物をし、一番上の女の子は私といっしょに暖炉前の敷物の上にはしゃがんで、猫の頭を押さえていた。

ブランディがこっそりと部屋へ入ってきたのに気づいたのは、私がポケットに手をつ込んで体温計を探している時だった。どことなくこそそこそとした雰囲気で絨毯の上を忍び足で進み、何気なさを装って肘掛け椅子の前に座った。しばらくすると、肘掛け椅子の前脚を逆立ちで這い上がるように、尻を夫人の膝のほうへと徐々に持ち上げた。夫人はふと編物から手を離し、犬を押しやしたが、犬はすぐにまた逆立ち這い上がり始めるのだった。ごくゆっくりとしたルンバのリズムで尻を動かしながら、じりじりと逆さまに競り上がって行き、その間ずっと何事も起こっていないかのように涼しく無邪気ない顔をしている。その様子はちょっととした見物だった。

私は体温計を探すのも忘れてしばらく見とれていた。ウエストビー夫人は編物の複雑な部分に熱中していて、ブルージーンズをはいた彼女の格好のいい膝に、ブランディの尻が今やしっかりと乗ってしまったことにも気づかないようだった。第一段階はうまくいったことを確認するかのようには一息入れ、それから今度は前足を椅子の脚にかけて、さらに体をじりじりと押し上げて尻の位置を直し、ほとんど脳天を下にした逆立ちの格好になった。あとひと押しすれば、大きな犬の図体がウエストビー夫人の膝に完全に乗ってしまうところまで来た瞬間、夫人が編物の込み入った部分を編み終え、顔を上げた。

「まあ、何してるの、ブランディ？ほんとにばかねー！」

夫人が尻を片手で押すと、犬は悲しげに絨毯へずり落ち、そこへ腹這いになって、哀れっぽい目で飼い主を見上げた。

「いったい、どうしてあんなことを覚えたんです？」と私はきいた。

ウエストビー夫人は笑った。

「たぶん、この古いブルージーンズのせいなんです。ブランディがほんの小さな子犬として初めてこの家に来た時、わたしはよく膝の上で何時間もあやしていたんですけど、そのころたいいていジーンズをはいていたんです。それ以来、大きくなってからでもジーンズを見させると、すぐにわたしの膝の上に乗ろうとするんです」

「しかし、飛び乗ったりはしないんですか？」

「ええ、しません」と夫人は言った。

「一度飛び乗って叱られたんです。こんな大きな体でわたしの膝に乗れないのは、百も承知なんですよ」

「それで、今ではああやってこっそり近づこうとするんですね？」

夫人はくすくす笑った。

「そうなんです。わたしが編物や読書に没頭していると、時々後ろ向きで這い上がって、お尻を膝に乗せようとするんです。泥んこの中で遊んできた後だったりすると、泥だらけにされて着替えが必要になることもあるんですよ。そんな時はきつく叱るんですけど」

ブランディのような患者は、わたしの毎日の往診に精彩を与えてくれた。我が家の犬を散歩させている時など、川辺の草原でブランディが遊んでいるのをしばしば見かけた。ある時ひどく暑い日があり、たくさんの犬が棒切れを追いかけたり、あるいは単に涼む目的で水の中へ入り込んでいた。たいていの犬は水の中へそろそろと入り、静かに泳ぎ始めるのだが、ブランディのやりかたは独特だった。

たまたまわたしはブランディが川岸へ走っていくのを目に留めた。水際でいったん止まるだろうと思って見ていたところ、スワンダイヴ式に脚を前後に伸ばして、空飛ぶ狐のように一瞬体を宙に浮かせ、ザブンと大きな音を立てて深みに飛び込んだのだった。完璧にのんきな外向型の犬のしぐさだとわたしは思った。

その翌日同じ草原で、私はもつと風変わりなしぐさを目撃した。草原の片隅に幼児用の遊び場があり、ブランコやメリーゴーラウンドや滑り台が置かれていた。ブランディが遊び興じていたのは、滑り台だった。

この遊びのために、ブランディは柄にもない真面目くさった表情で子供たちの列に加わり、静かに待っていた。自分の番が回ってくると、階段を上り、すっかり偉そうな尊大な面構えで金属の斜面を滑り降り、落ち着き払った歩きっぷりで一回りして、列にまた加わるのだった。

ブランディの仲間の小さな男の子や女の子は、まるで犬を人間のように思って受け入れている様子だった。その光景が面白くてなかなか立ち去れなかった。まる一日みても飽きないような情景だった。ブランディの奇矯な振る舞いを思い出すと、私はしばしば笑いが堪えきれなくなる。

しかし、滑り台の光景から二、三か月後、ウエストビー夫人が診療所へ犬を連れてきた時は笑えなかった。いつもの弾けるような元気は消え失せ、診察室へ続く廊下をよろよろと歩いてきた。診察台へ犬を抱き上げた時、体重が極端に減っているのがわかった。

「ウエストビーさん、ブランディはいったいどうしたんです？」と私はきいた。

夫人は心配そうな目で私を見た。

「実はこの二、三日元気がなくて、そわそわしたり咳をしたりしていたんです。餌もあまり食べなくなりましてね。そして、今朝になると、ひどく具合が悪い様子で、ご覧のように呼吸もハーハーあえぐようになったんです」

「なるほど・・・、確かにね」

私は体温計を差し込み、激しく膨らんだり萎んだりする腹部の動きと、大きく開けたままの口や不安げな目を観察した。

「確かに、これは相当まいっていますね」

体温は四十度だった。聴診器を取り出して犬の胸に当てた。スコットランドの老医師が、重病患者の胸を「共鳴箱」のように鳴り響いていると表現したという話を聞いたことがある。ブランディの胸がまさにそれだった。苦しい呼吸音にゼーゼー、キーキー、ブクブクというたあらゆる雑音が混じっていた。

私は聴診器をポケットにしまった。

「これは肺炎ですね」

「あら、どうしましょう」

夫人は手を伸ばして、激しく上下する胸に触った。

「大変な病気ですよね？」

「ええ、そう思います」

「でも・・・」

夫人は訴えるような目で私を見た。

「新しい薬ができてからは、命にかかわることはないときいていますけど」

私はためらった。

「ええ、おっしゃる通りです。人間とたいいていの動物の場合、サルファ剤と新しいペニシリンのおかげで状況は完全に変わりましたが、犬の場合、まだ非常に治りにくい病気だと思います」

当時から三十年後の今も、状況は同じだ。ペニシリンの後から出てきたストレプトマイシン、テトラサイクリンといった抗生物質、あるいは合成化学薬品、そして、新しい非抗生物質やステロイドなどの薬品を総動員しても、肺炎にかかった犬の治療はいまだに難しいのだ。

「でも、まさかもうだめってわけではないんでしょうね」

ウエストビー夫人は、心配でたまらないという顔で言った。

「とんでもない。望みはありますよ。ただ、効くはずの治療をしても効かない犬がたくさんいるってことを言いたかったんです。しかし、ブランディは若くて丈夫ですからね。治る見込みは十分ありますよ。それはともかく、いったいどうしてこんなことになったんですかね？」

「ああ、それなら心当たりがあるんです、ヘリオット先生。一週間ほどまえに川で水浴びをしたんです。こんなに寒い気候ですから、川に近づけないようにしているんですけれど、棒切れが浮いていたりすると、川の真ん中へ飛び込んで行きます。先生も見たことがありませんよ。この犬がする奇妙な振る舞いのひとつなんですけど」

「ええ、知っています。ブランディは泳いだ後で震えていましたか？」

「ええ、すぐ家に連れて帰りましたが、なにしろ凍えるような寒い日だったんです。体を拭いてやる間ずっと震えているのがわかりました」

私は頷いた。

「たぶん、それが原因ですね。とにかく治療を始めましょう。まずペニシリンを一本打ちます。そして、明日お宅へ伺ってもう一本打ちます。診

療所へ連れて来るには、弱り過ぎていますよ」

「わかりました、ヘリオット先生。ほかに何か？」

「ええ、ひとつあります。われわれが肺炎服と呼んでいるものを、ブランディのために作ってもらいたいです。古毛布にふたつ穴を開けて、そこに前脚を通し、体を包んでやって背中留めるんです。古セーターがよければ、それでもかまいません。要は、犬の胸を何かで包んで暖かくしてやることなんです。用足しに庭へ出す以外は、外へ出さないでください」

翌日、私は往診して二本目の注射を打った。容態はあまり変化していなかった。その後四日間連続して注射したが、残念ながらブランディはほかのたくさんの犬と同じで、ペニシリンの効き目がないことがわかった。体温は確かに少し下がったが、餌をほとんど食べず、徐々に痩せ細るばかりだった。

何日かが過ぎた。犬は相変わらず咳をして、ハーハーあえぎ、虚ろな目の嗜眠状態に深くはまり込んでいた。あれだけのんきで元気いっぱいだった犬が死ぬかも知れないという、二、三週間前ならとても考えられないような結論に、私はしばしば到達せざるをえなかった。

しかし、ブランディは死ななかった。生死の境を乗り越えた。ただ、それ以上のものではなかった。体温は下がり食欲は増し、安定状態へと回復したものの、その状態に満足してしまっただけのようだった。

「もう昔のブランディでなくなっちゃいました」

二、三週間後のある朝、私が往診に行くと、ウエストビー夫人は言った。その目には涙が溜まっていた。私は頷いた。

「ええ、確かにそのようですね。オヒョウ肝油は、やっているんですね？」

「ええ、毎日。でもなんの効き目もないみたいなんです。ヘリオット先生、ブランディはどうしてこうなってしまったんです？」

「きわめて悪性の肺炎が治ったばかりですからね、おそらく慢性胸膜炎、癒着、その他の肺損傷が残っているんです。治りきらずに安定期に入ってしまったような様子ですね」

夫人は目頭を押さえた。

「ブランディがこんなふうになっているのを見ると、心が張り裂けそうになるんです。まだほんの五歳だというのに、まるで年寄りの老いぼれ犬みたいじゃないですか。それにどんな犬にも負けないほど元気だったのに」

夫人はしくしく泣いて、鼻をかんだ。

「ごみ箱をあさったり、わたしのジーンズを汚したりして、わたしによく叱られていたころのことを思うと、もういっぺん、ああいう昔のいたずらをしてくれないかしらと思うんです」

私はポケットの奥深くへ手を突っ込んだ。

「そういうことは、もう何もしないんですか？」

「ええ、全然。ただ家の中をぶらぶらしているだけです。散歩にも行きたがりません」

私はブランディに目をやった。犬は隅の居場所から起き上がり、暖炉のほうへゆっくりと歩き出した。痩せ衰え生気のない目でしばらく暖炉の

前に立っていたが、やがて初めて私に気づいたようだった。尻尾の先がかすかに揺れたので、それとわかった。しかし、すぐに咳き込んで呻き、暖炉前の敷物に崩れるように座り込んだ。まさにウエストビー夫人の表現通りだった。ブランディはひどい老いぼれ犬のようだった。

「これから、ずっとこうなんでしょうか？」と夫人はきいた。

私は肩をすくめた。

「希望を持つしかありませんね」

しかし、実際にはあまり希望が持てないと思いながら、車に乗り込んで走り去った。悪性肺炎で肺損傷が残った子牛を、私は何頭も見ていた。肺炎は治ったものの、その後死ぬまでずっと痩せて落ち着きがないままで終わり、「発育不良牛」と呼ばれていた。当時は、また人間の医者たちも患者名簿にたくさんの「胸部疾患」患者を抱えていたが、そうした患者たちは多かれ少なかれ同じような容態だった。

それから何週間か経過し、さらに何か月かが過ぎて、私は初めてブランディを見かけた。ウエストビー夫人が引き綱につないで散歩させているところだった。かなりの月日が経ってもなお、犬はあまり動きたがっていないことが一目でわかった。飼い主は犬に合わせて、ひどくゆっくり歩かなければならなかった。ブランディの姿を見ると、よたよた歩く老いぼれ犬を連想させられ、悲しくなった。しかし、私は少なくともあの犬の命を救ってやったんだと、自分に言い聞かせた。今やもうあの犬のために何もしてやれることはない。そう思って、私は極力ブランディのことは考えないようにしようと決めた。

実際私はブランディを忘れようとし、二月のある日の午後までうまく忘れていたのだった。その前の晩は火事場を潜り抜けたような気分だった。午前四時までかかって疝痛の馬を治療し、馬が痛みから解放されて落ち着いたのを見届け、よかったと思いながらベッドへ這い込んだところへ、牛の出産だと叩き起こされた。小さな牝牛から大きな子牛を生きたままなんとか取り出したが、この力仕事で完全に疲労困憊して、なんとか家に戻ったものの、ベッドへ戻るにはもう遅すぎた。

午前の巡回診をやつとの思いですませると、あまりにも疲れて体がばらばらになりそうだった。昼食の間、料理を前にコクリコクリとやるのを、妻のヘレンは心配そうに見守っていた。二時に待合室に二、三匹の犬が来ていて、私は半開きの目で機械的に診察した。最後の患者を迎えるころには、私はもう立ったまま眠っている始末だった。実際自分がそこに全く存在していないかのように感じていた。

「つぎ、つぎぞ」

私はもぐもぐと言って、待合室のドアを押し開け、犬が廊下へ連れ出されるいつもの景色を期待してドアを押さえていた。

しかし、この時ばかりは大きな違いがあった。男が戸口に現われ、小さなプードルを連れていたところまでは普通だった。しかし、私の眠い目をまんまるく見開かせたのは、犬が後ろ足で立って歩いているという姿だった。自分が半ば眠ったような状態だとわかっていたので、きつと物がよく見えなくなっているのだらうと思ひ、じっと犬を見下ろしてみたが、目に飛び込んでくる景色は変わらなかった。小さな犬は胸を突き出し、頭をそらし、兵士のようにまっすぐに立って戸口を抜け、さっそうと歩いて行くのだ。

「どつぞどつぞ」

私はしわがれた声で言い、タイル張りの廊下を診察室へと案内した。途中、目撃証拠を確認するためにやむにやまれず後ろを振り返った。が、

見えるものは同じだった。プードルは相変わらず後ろ足で立って、飼い主に並び平然と歩いていた。おそらく飼い主は私の顔に戸惑いの色を認めたに違いない。突然大声で笑い出したからだ。

「心配いりませんよ、ヘリオット先生」と彼は言った。

「このチビ犬は、私がペットとして飼う前に、サーカスで訓練を受けたもんでね。こいつのささやかな芸を見せびらかすが、私は好きなんですよ。これを見るとだれもが驚くもんで」

「いや、実際全くその通りですね」と私は息を呑みながら言った。

「私はもう少しで心臓が止まるところでしたよ」

プードルは病気ではなく、爪切りに来ただけだった。私は笑いながら犬を診察台へ上げて、爪切り器具を使い始めた。

「後ろ足の爪は、切ってもらいたくないかも知れませんか」と私は冗談を言った。

「自分で擦り減らしたいんじゃないですか」

私は、ささやかな冗談を言える程度に内心の動揺が収まったのを知ってほっとした。しかしながら、爪を切り終えるころには忘れかけていた眠気が戻ってきて、飼い主と犬を玄関まで見送りながら倒れて眠り込まないのが不思議な気分になっていた。

小さなプードルが、今度は正常な歩き方で通りをとぼとぼ歩き去るのを見守りながら、犬が何か異常な面白いことをするのを見るのは久しぶりだと、突然思い至った。ブランディの奇矯な振り舞いがなつかしく甦った。心む思ひ出にひたりながらドアの柱にぐったりと寄りかかり、私は目を閉じた。しばらくして目を開けると、なんとという偶然なのか、ブランディがウエストビー夫人に連れられて街角を曲がってくるのが見えた。

犬の鼻は、大きな赤いトマトスープ缶ですっかり隠されてしまっていた。犬は私の姿に気づくと、狂ったように引き綱を引っ張り、激しく尻尾を振った。

これは間違いなく幻覚に違いない。私は過去を覗き込んでいるのだ。実際、やるべきことはすぐにベッドへ行って寝ることだ。しかし、私が根が生えたようにドアの柱に寄りかかったままでいると、大きな犬は弾むように階段を駆け上がり、私の顔をなめようとしたが、スープ缶が邪魔になり、はしやぎすぎて後ろの片足を一段踏み外すことで満足した。私はウエストビー夫人のこやかな顔をじっと見つめた。

「いったい・・・、これは・・・？」

きらきらする目でここにこしている、夫人はいつそう魅力的に見えた。

「ほら、この通りです、ヘリオット先生！ブランディは元気になりました。こんなに元気ー！」

その瞬間、私はパッチリと目が覚めた。

「なるほど、なるほど、それで、あの缶を外してもらいたいというわけですね？」

「ええ、そうなんです。お願いします」

ブランディを診察台へ上げるのはなかなかの力仕事だった。犬は病気前よりも重くなっていた。私は例によってピンセットを手に取り、口と鼻にすっぽりはまっている缶のぎざぎざの縁を、少しずつ外側へ折り曲げた。トマトスープはこの犬の好物のひとつに違はなく、ほんとうに深く鼻

先を突っ込んでいて、缶を犬の顔からスツと抜き去るまでにしばらくの時間がかかった。犬がペるペるなめようとする攻撃から身を守りながら、私は言った。

「ブランディはごみ箱あさりに戻ったようですね」

「ええ、そうなんです。ほとんど日課になっているんです。すでに何個かはわたしがこの手で外してやりました。子供たちとの滑り台遊びも、また始めたんですよ」

夫人はうれしそうに笑った。ふと思いついて、私は白衣のポケットから聴診器を取り出し、肺の音を聞いた。申し分のない澄んだ音だった。時々かすかに雑音が混じったが、かつての不協和音は消えていた。

信じ難さと神に感謝したい気分の入り混じる複雑な思いで、診察台の上の犬を腰を屈めて見つめた。犬はすっかり前に戻り、行きている喜びにあふれて騒々しかった。のんきに舌を垂らして笑顔を作り、診療所の窓から差し込む太陽の光で、艶やかな茶と黒の毛並みが輝いていた。

「でも、ヘリオット先生、いったいどうしてこうなったんでしょう？ いったいどうしてブランディは治ったんです？」

ウエストビー夫人は、あらためて驚いたように目を大きく開けていた。

「グイス・メディカトリクス・ナトゥラエ」

私は自然への深い畏敬の念を込めて答えた。

「どういう意味ですか？」

「自然の治癒力。それが働き出すと、どんな獣医でも太刀打ちできない力ですよ」

「そうですか。それがいつ働き出すかは、だれにもわからないんですね？」

「ええ」

私たちは犬の頭や耳や脇腹を撫でてやりながら、しばらく黙っていた。

「ああ、そうそう、ブルージーンズへの興味はどうなんですか？」と私は言った。

「あれもまた始まりましたか？」

「ええ、もちろん！ ブルージーンズは目下、洗濯機に入っているんです。完全に泥んこになって。それって、すばらしいことじゃありませんか？」

このストーリー（お話）を、読んだことがない人にも分かりやすいように、要約しなさい。ストーリーが正しく伝われば字数は自由に構いません。

